

## 調査研究彙報

この1年、以下のような調査・研究・整備事業にもかかわってきた。

### 旧江尾発電所（鳥取県江府町）

◆**桂離宮の発掘調査** 桂離宮庭園整備基本工事にともなう発掘調査を、宮内庁からの委嘱をうけて平成6年度から実施している。平成8年度は、修理対象となった池の乱杭護岸付近に7ヶ所の小トレンチを設定して、おもに断面観察により護岸の築成状況等の調査をおこなった。この結果、各調査区とも護岸石の抜取り穴等がないことから、それらの部分の護岸はもともと乱杭ないしは草止め等のソフトな材料を用いていたことが判明した。また、大部分の調査区で、当初の護岸より池側に張り出すかたちでの改修がおこなわれている状況があらわになった。このことから、池は全体的に築造時よりも、わずかではあるが、狭まっていると推定できる。遺物としては、「千代原 半右衛門」の刻印のある軒平瓦が出土し、江戸時代後半のものと思われるから、桂山荘への瓦の供給業者についての知見を得ることができた。（小野健吉）

◆**鳥取県の近代化遺産調査** 鳥取県の近代化遺産調査は、平成8年から2ヶ年計画ではじまった。近代化遺産とは産業・交通・土木に関わる幕末～戦前の遺産であり、平成2年度から文化庁の国庫補助事業として、各県で調査を進めている。奈文研としては、秋田県につぐ2県目の調査になる。初年度はまず、県内市町村全域で悉皆調査をおこない、39市町村から610件の対象物件をリストアップした。これをもとに平成9年1月31日に調査委員会を開き、約100件の詳細調査候補を選びだした。第1回の詳細調査は、3月11日～15日、県西部の米子市を中心におこなった。このうち、江府町の旧江尾発電所は、ルスティカ風の石壁と木造トラス架構の屋根をもつ堂々とした外観の建物である。ところが調査の結果、この石壁は意匠材ではなく構造体であり、大正7

年に建造されたことがあらわになった。発電関係の備品は撤去されているものの、純石造建造物として貴重な近代化遺産である。平成9年度は2度の詳細調査を実施し、報告書を刊行する予定である。（箱崎和久）

◆**中国黒龍江省におけるオロチョン族とエヴェンキ族の住居調査** 住宅総合研究財団の助成研究「北東アジアのツングース系諸民族住居に関する歴史民族学的研究」の第3次調査として、中国黒龍江省の小興安嶺一帯をおとずれ、オロチョン族とエヴェンキ族の住居を調査した。小興安嶺のツングースは、もともと「仙人柱」とよばれる円錐形テントをもって遊動する狩猟民だったが、1950年代末からの定住化政策によって、近年は満州族・漢族系の平屋建物に住むようになっている。そこで、各地の平屋建物を実測調査するとともに、狩猟時において今なお使われている「仙人柱」を作ってもらい、その製作過程を記録にとった。興味深いのは、平屋建物の西の脇間に作られるコ字形の万字炕と神棚マルの位置関係が、テント内におけるコ字形の座と神像のそれに対応していることである。調査の詳細は、『住宅総合研究財団研究年報』23号で報告した。（浅川滋男）

◆**ベトナムにおける日本人墓の発掘調査と保存整備** ベトナムのホイアン市には、17世紀中期の日本人墓が残っている。その現状を把握するため、まず実測調査と写真撮影をおこない、さらに墓を発掘調査した。その結果、墓本体がシックイでつくられた3段構造であること、最下段が墓室で現地地表下80cmもの深さにおよぶこと、第2段までは本来、円形の土盛りで覆われていたこと、現状の第3段は当初のものではなく、内部に当初のものと考えられる亀甲状の第3段が埋め込まれていること、墓石前面には2段のテラス

があったこと、などがあらわになった。これらの成果をふまえて、以下のような保存整備計画を立案し、ホイアン市の同意を得た。

- 1) 砂岩製の墓石およびシックイ製の墓本体を合成樹脂で強化したうえで、第2段目までの土盛りを復元する。
- 2) 周囲に墓の保護を兼ねた見学路を新設する。
- 3) 越・仏・英・日4ヶ国語の説明板を設置する。（高瀬要一）

◆**中ノ庄遺跡の整備** 奈良県宇陀郡大字陀町に所在する中ノ庄遺跡は、柿本人麻呂が軽皇子の伴をして安騎野に猟をし、「かぎろひ」をみた頃の建物遺構・池状遺構などが確認された遺跡である。遺跡地は当初、町民プール建設の予定であったが、遺跡公園として整備することになり、建物復原・池状遺構整備などとあわせて、故中山画伯の壁画「安騎野の朝」の騎馬人麻呂像を原寸の石像彫刻として設置することになった。石像製作の概略手順は、次のとおりである。寸法計測→1/6計画図→1/6粘土模型→1/6樹脂模型→原寸粘土模型→型取り→石膏模型→石像彫刻。石材は山東省産の黒雲母の少ない花崗岩とし、原寸模型以降は中国上海市内で製作した。問題は、壁画のイメージを損なわず、馬体・裝飾物などをどこまで7世紀後葉に近づけられるか、一石の彫刻の荷重を馬の4本足でいかに支えるかであった。半年あまりの短期間であったが、無事竣工をみた。（加藤允彦）

◆**名勝「旧大乗院庭園」の整備** 3年目となる旧大乗院庭園の整備事業は、合計約600㎡を引き続き発掘し（年報Ⅲ参照）、あわせて南3中島の整備を実施した。中島の整備は、3島の景観を残しつつ水際線では1島とする考えもあったが、江戸時代の形状をできる限り尊重する整備方針にしたがつて、現状どおり3島として整備することにした。昨年度と同じく、粘土叩き締め、杭丸太打ち込み、撒き石による洲浜状化粧を施した。中島の植栽はサルズベリを残して、その他は伐採し地被に野芝を張った。なお、景石は現代の表土層に据えられているが、当分の間存置することとした。（加藤允彦）